

〔時慶卿記〕慶長八年三月五日、吉野一見發足、九日、泊瀬、到木津九里、一宿、略、布留へ詣、社川橋等ニ詠吟シ、橋邊ニテ中食ヲ用、十日、木津を立、於巨椋窪田新介宿ニテ中食ス、

〔言經卿記〕慶長八年十一月十四日丙寅、女院へ參了、禁中ト女院ト間廊下新造了、後ニ始而出御了、御振舞已、後前ニ兩度マデ御對面御雜談了、中、略、濟々也、次御還御了、

〔菜根百事譚二〕往昔大猷院様家德川御代、御咄ノ衆トテ毎日登城シテ御譚話等申上ラレシ衆中、

毛利甲斐守秀元、丹羽五郎左衛門長重、蜂須賀蓬庵、林道春等ナリ、是等ノ衆中代ル、登城シテ、夫々ノ館ヨリ辨當參リケル、萩ノ間ニテ寄合是ヲ食シタマフ、珍敷菜杯アレバ、互ニ取カハシテ賞シ給ヒシトカヤ、毛利侯ノ辨當ニ鮭ノ有ケレバ、是ハ珍敷トテ皆賞味セラレシト也、阿部對州ハ燒飯ヲ紙ニ包テ持參アリ、御晝食ニ召上ラレシ、其包紙ノ皺ヲノバシ、其紙ニ付シ飯ヲ拾ヒテ是ヲ給ラレ、其跡ヲ鼻ヲカミナドセラレシヲ見ル者有シトナリ、

〔守貞漫稿二四〕芝居茶屋

中飯、江戸ハ幕ノ内ト號ケテ、圓扁平ノ握リ飯十顆ヲ僅ニ燒之也、添之ニ燒雞卵、蒲鉾、コンニヤク、燒豆腐、干瓢、以上是ヲ六寸重箱ニ納レ、人數ニ應ジ、觀席ニ持運ブヲ從來ノ例トス、專ラ茶屋ニテ製スコト勿論ナレドモ、小屋ハ自家ニ調之ズ、芳町ニ製之店アリテ、一人分價錢百文トス、笹折ニ盛リタリ、是ヲ茶屋ニテハ重ニ詰サセテ客ニ出スモアリ、今ノ地ニ遷テモ、芳町ヨリ出店ヲ出シ、兩店トモ萬久ト云、名物ノ一也、

又客ノ好ミニヨリ是ヲ用ヒズ、茶漬或ハ本膳ヲモ調ズル也、是ハ專ラ芝居ニ運バズ、茶屋ニテ食ス、

〔松屋筆記九十六〕晝辨當を晝養といふ

今俗晝の辨當といふは、古く晝養といへり、今昔廿九の廿三語に、晝ノ養セムトテ藪ノ中ニ入ル